芥川龍之介のドストエフスキー体験

―その地平に潜むもの、ふたたび「羅生門」との関りに触れつつ―

宮坂覺

はじめに

日本の近代の作家で、ドストエフスキー体験をその文学的出発にうかがえる作家は枚挙に遑ない。芥川もその一人である。が、「歯車」など個々の作品におけるドストエフスキー文学の影響は論じられることがあっても、ドストエフスキー体験そのものを論じたものはほとんどない。ドストエフスキー文学との比較文学的業績[1]は、清水孝純や国松夏紀の仕事が目立つが本格的にドストエフスキー体験を論じてはいない。芥川のドストエフスキー体験の実態は、「羅生門」執筆の二年前の秋の藤岡蔵六宛書簡に書き込まれているが、それは指摘されていても、芥川の文学的出発に関わっては論じられていないのが現状である。

かつて、「芥川龍之介とドストエフスキー――『罪と罰』の『羅生門』への変奏」（'97・5、『キリスト教文学』）や「異国で読んだ『羅生門』―黒沢明、ドストエフスキー、リストラ〉―」〈講演録〉（'00・5、『文学・語学』全国大学国語国文学会）などで、芥川の文学的出発におけるドストエフスキー体験、特に「羅生門」との関わりに触れたが、それに言及されたものは見ない。[2]近年、特筆すべき動向であるが芥川龍之介に関わる辞典が、一気に四冊刊行されている。すなわち、菊池弘・久保田芳太郎・関口安義編『芥川龍之介事典』（'01・7、明治書院、'85版の改訂版）、関口・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』（'02・6、勉誠出版）、志村有弘編『芥川龍之介大事典』（同・7、同）、関口編『芥川龍之介新辞典』（'03・12、翰林書房）である。『芥川龍之介全作品事典』を除く三冊に「ドストエフスキー」の項目はあるが、「羅生門」とのかかわりは言及されていない。たとえば、最新でかつ項目説明が丁寧な『芥川龍之介新辞典』におい

て、国松夏紀が項目担当をしているが、先の藤岡蔵六宛書簡に触れた後、

この感動は「南京の基督」に余韻を残し、「妙に赤々と煤けた光」「うす暗い光」の下での物語という状況設定に生かされている。また、宋金花の〈敬虔な私窩子〉の形象は、〈聖なる娼婦〉ソーニャに通じ、両者共通の源泉は〈罪深い女〉マグダラのマリアであろう。

と、藤岡宛書簡（'13〈大2〉・9）から「南京の基督」（'20〈大9〉・6）まで、すなわち七年弱もとんでいる。多かれ少なかれ、従来はこのような見解にほぼ置かれていた。これは、再考する余地がある。従来から、この空白が気になっていたが、前稿において論じたように、「羅生門」の背後に「罪と罰」を視野に捉えることによって、ドストエフスキー体験がより鮮明さを持つ。

先の前稿が、二つの作品の指摘に留まったり、講演録であったりしたので、本稿においては、その光源であるドストエフスキー体験をより精緻に検証することによって、芥川龍之介あるいは芥川文学とドストエフスキーとの関係の実像を検証したいと考える。

なお、本文引用は、芥川文庫所蔵の"Crime and punishment" London, Walter Scott, [n.d.][3]及び、工藤精一郎訳『ドストエフスキー全集』第七巻「罪と罰」（Ⅰ）、第八巻「罪と罰」（Ⅱ）（'78・5、6）によった。また「聖書」の引用は、芥川が愛読していた、「元訳聖書」（明治訳）によった。

一　芥川とドストエフスキー

ドストエフスキーの文字が、芥川の書き残したものに現れるのは、残された文献によれば、一九一〇（明治43）年八月五日付、山本喜誉司宛自筆画葉書に、「A TH DOSTOEIWSKI」と説明付きのドストエフスキーの肖像画の模写である（図版1）。この自筆画葉書は、府立三中時代の大親友山本（後、結婚する文の叔父である）宛に、官報で一高合格を知りそれを知らせるものであった。「今日官報ニ

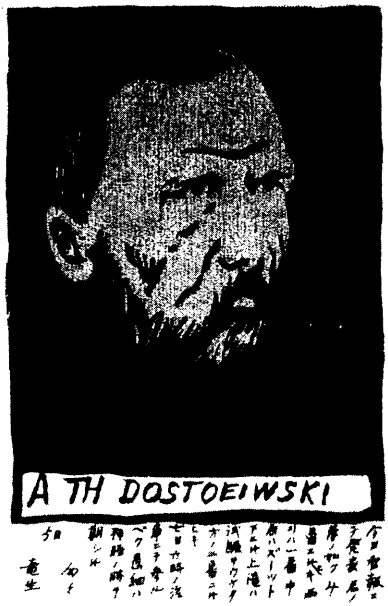

図1

テ発表君ノ夢ノ如ク4番ニハヒキ西川ハ一番中原ハズーツト下ニハ上滝ハ試験ヲウケタ方ニ二番ニ候ヒキ」などと書かれている。芥川は、無試験組合格の四番であった。それを、ドストエフスキーの肖像を模写した画葉書で書き送ったのである。作品そのものは、まだ読んではいなかったが、ドストエフスキーの名前は既に芥川の視野に捉えられていたのである。次にドストエフスキーの名前が出現するのは、翌年七月一八日の山本宛書簡「そしてあの刈麦の畑のはてにある藁葺の中には、サモワルの音を立てる傍で、ステツプのリアが酔倒れてゐるやうに思はれます、けれどもプーシキンは—レルモントフは—ドストエフスキー—トルストイは—ゴルリキーはどこにゐるのでせう」とドストエフスキーが見られる。これらの資料により、三中時代に何らかの情報が入り、さらに一高入学時にはロシア文学の代表的作家として認識できていたことが理解できる。その芥川が、ドストエフスキー作品をはじめて読んだのは、二一歳の秋のことである。[4] のちに詳しく触れる大正二年九月五日付藤岡宛書簡に「始めてドストエフスキーをよんで大へんに感心させられた」とあり、強烈なドストエフスキー体験を吐露している。さらに、日本近代文学館所蔵「芥川龍之介文庫」の"Crime and punishment" (London, Walter Scott, [n.d.]) に、その読了日として「3rd. SEP. '13 at Sinjuku」(図版2) が記されいることから、藤岡宛書簡でドストエフスキー体験を吐露するのは、読了の二日後ということが分かる。

But now a new history commences: a story of the gradual renewing of a man, of his slow progressive regeneration, and change from one world to another—an introduction to the hitherto unknown realities of life. This may well form the theme of a new tale; the one we wished to offer the reader is ended.

THE END.

3rd Sept. '13
at Shinjuku.

図2

清水孝純は「罪と罰」の魅力について次のように書き始めている。

『罪と罰』くらい、ドストエフスキーの小説の中でも世界中の人々によって、知られ、読まれ、愛されているものはないでしょう。映画に、また演劇でもそれは親しまれています。それは何よりも主人公ラスコーリニコフの魅力、また可憐な乙女ソーニャの楚楚たる薄幸の姿、さらに、登場人物の独自の個性の色彩豊かな群像が、渾然として奏でる一大交響曲だからでしょう。

ドストエフスキーの作品の中でも、これほど形式的にもっともまとまり完成度の高いものはない、と思われます。（「序論―『罪と罰』の魅力―」[5]）

芥川も、この「罪と罰」読了によって強烈なドストエフスキー体験をしたのである。このドストエフスキー体験が、従来のように、芥川文学に影を落とすのはこのドストエフスキー体験から七年弱後の「南京の基督」と考えるのは、説得力がないと考える。

駒場の日本近代文学館所蔵「芥川龍之介文庫」には、ドストエフスキー関係書籍が五冊確認できる。

① Crime and punishment. London, Walter Scott, [n.d.]

（図版二のように巻末に、「3rd.SEP. '13 at Sinjuku」とある）

② Novels,tr. by Constance Garnett. London, Heinemann.

vol.1 The brothers Karamazov. 1923.

vol.10 White nights and other stories. 1918

③ Novels, tr. by Constance Garnett. New York, Macmillan

vol.11 An honest thief and other stories. 1919.

④ Stavrogin's confesson and the life of a great sinner, with intoro.and explan-atory notes,tr. S. S.Koteliansky and Virginia Woolf. Richmond, Hogarth, 1922.

の五冊である。藤岡書簡の「罪と罰」は、言うまでもなく、①である。巻末に、読了日「3rd. SEP. '13 at Sinjuku」記されているが、芥川一家は一九一〇（明治43）年の秋、本所小泉町から実父敏三の持ち家があった内藤新宿に越し一四〈大正三〉年一〇月末まですむが、「Sinjuku」とは読了当時の自宅のことである。繰り返すが、藤岡には、「罪と罰」読了の二日後にその感動を書き送ったことになり、その感動の大きさが知れよう。その感動は、「羅生門」と地底でつながっているのであろうか。

「羅生門」は、しばしば、吉田弥生との失恋事件で読まれてきた。事実、「羅生門」の実質的な構想起筆は、失恋事件が大きくかかわっていたことは間違いない。芥川は、

それからこの自分の頭の象徴のやうな書齋で、當時書いた小説は「羅生門」と「鼻」との二つだつた。自分は半年ばかり前から悪くこだわつた戀愛問題の影響で、獨りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあえず先、今昔物語から材料を取つて、この二つの短編を書いた。

（「あの頃の自分の事」別稿　'19（大8）・1『中央公論』）

と、記している。周知のように、「羅生門」の草稿と思われる下書き原稿が、相当数残っており（岩波版最新全集二三巻所収）、さらに、「下人」にいたるまで「交野の八郎」「交野六郎」「交野平六」

「侍」などが見られ興味は尽きない。「羅生門」は、刻苦彫鏤の果ての果実であり、ある程度の時間も必要であったかもしれない。その起筆時期を、海老井英次は一九一四年（大正三）年一一月頃の芸術的開眼時期との関わり（'70・11、『「羅生門」――その成立時期』『国文学』）で説くが、それなりの説得力を持つ（関口安義は、一九一一（明治四四）年二月の徳富蘆花の謀反論の講演との関わり（『「羅生門」を読む』小沢書店、'99・1）で説くが、一一年まで遡行するのはちょっと無理があると思われる）。

「罪と罰」読了と「羅生門」起筆前後をもう一度整理しておきたい。

一九一三（大正二）九月三日、"Crime and punishment"「罪と罰」読了。その二日後の五日に藤岡蔵六あてに「罪と罰」を激賞し感動した書簡を送ったのである。

「罪と罰」読了と、ドストエフスキー体験のあの感慨を受ける素地はあったのであろうか。一九一四年（大正三年）春、吉田弥生との恋におちている。五月一九日付書簡で「僕の心には時々恋が生まれる　あてのない夢のような恋だ」と、親友井川恭に書き送っている。同月『帝国文学』には「To signoria Y Y」の献辞が着いた短歌「桐」が、さらには吉田弥生本人への書簡が確認できる。すなわち、「桐」の脱稿は四月だから、そのころにはには姉ヒサの遊び仲間であり幼馴染の弥生と恋愛におちたと思われる。

この年の夏の弥生宛の書簡が確認されている。平行して「精神的革命」とのち表現する（'19・7・31　井川宛書簡）ほどに、精神が高揚している。一一月頃の書簡には、「マチスが好きです（中略）ほんとうに偉大な芸術家だと思ひます、僕の求めているのはあゝ云ふ芸術です日をうけてどん〳〵空のほうへのびてゆく草のやうな生命力の溢れている芸術です」「これまで僕の書いていゐた感傷的な文章やうたにはもう永遠さやうならです」（11・14　原善一郎宛）、「今までの僕の傾向とは反対のものが興味をひき出した　ボクは此頃ラッフでも力のあるものが面白くなつた」（11・30　恒藤〈井川〉恭宛）などと書き送っている。いわゆる「精神的革命」というべき精神の高揚である。

この年の暮れから翌年の新春にかけて、弥生との恋は養家芥川家の事情（特に、実質的に養育してくれた伯母フキの強固な反対）で破恋に終わる。そして、先に触れた「あの頃の自分の事」別稿の「半年ばかり前から悪くこだわつた戀愛問題の影響で、獨りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた。そこでとりあえず先、今昔物語から材料を取つて、この二つ（論者註「羅生門」「鼻」）の短編を書いた。」ということになるのである。

この流れの中で、「罪と罰」読了の影響が一過性のものであったとは考えられにくい。一一月の書簡の言辞を、「精神革命」と捉えるならば、ドストエフスキー体験は、想像以上に尾を引いていたことは容易に想像できよう。「羅生門」執筆に長い時間がかかったことを思えば、「罪と罰」読了の震撼は、その起筆にも影響を与えたことは想像するに難くない。

二　「ラザロの復活」と芥川のドストエフスキー体験

その芥川が、ドストエフスキー作品をはじめて読んだのは、二一歳の秋のことである。すなわち、芥川は一九一三（大正二）年九月、東京帝国大学英吉利文学科に入学するが、その九月三日に「罪と罰」を読了したのである（図版2参照）。これが、英訳ではあるが、ドストエフスキー作品の初の読了であった（既に、第三部までは、内田不知庵によって邦訳されていたが（註4参照）、次に触れる芥川書簡に「始めてドストエフスキーをよんで」という文言が見える）。既に言及したが、その二日後の九月五日付の藤岡蔵六に宛てて、

> 東京へかえつてから何と云ふ事なくくらした「罪と罰」をよんだ四百五十何頁　が悉心理描写で持きつてゐる一木一草もheroの心理と没交渉にかゝかれているのは一もない従つてplasticな所がない（これが僕には聊物足りなく感ずる所なのだが）其代りラスコルニコフと云ふheroのカラクタアは凄い程強く出てゐるこのラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節―ヨハネ）をよむsceneは中でも殊にtouctingだと覚えてゐる始めてドストエフスキーをよんで大へんに感心させられたが英訳が少ないので外のをつゞけてよむ訳には行かないでこまる。

とある。芥川とドストエフスキーとの関わりで、しばしば引用される文章である。本編が〈悉心理描写で持きつて〉いて、主人公ラスコーリニコフの〈心理と没交渉にかゝかれているのは一もない〉と言い切り、〈plasticな所がない〉、すなわちわざとらしい不自然のところがない（それには、芥川は〈聊物足りない〉と不満を述べているが）というのである。それゆえに、ラスコーリニコフの個性が〈凄い程強く出てゐる〉というのである。そして、作中最も印象的で感動的な場面として、挙げているのが〈ラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節―ヨハネ）をよむsceneは中でも殊にtouctingだと覚えてゐる〉。この場面は、「罪と罰」の第四部四節の場面である。

藤岡宛書簡にも〈ラザロの復活の節―ヨハネ〉と書かれていた

「ラザロの復活」は、もともと「罪と罰」の〈ヨハネによる福音書の第十一章〉と聖書でのありどころが書かれていた。この頃は、芥川は聖書を相当深く読んでおり、[6]「罪と罰」のこの箇所の内容に自然に共振したことは想像するに難くない。まず、芥川も愛読していた元訳聖書の訳で引用してみる。

ここにやめる者あり、ラザロと云ふ、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。此のマリヤは、主に香油を塗り、頭髪にて御足を拭ひし者にして、病めるラザロはその兄弟なり。姉妹らイエスに遣して『主よ、視よ、汝愛し給ふもの病めり』と言はしむ。之を聞きてイエス言ひ給ふ『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』。〈1-4〉（中略）イエスに言ひ給ふ『なんじの兄弟は甦へるべし。』マルタ言ふ『をわりの日、復活のときに甦へるべきを知る』、イエスに言ひ給ふ『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信ずるものは、永遠に死なざるべし。汝これを信じるか。』彼いふ『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず。』〈23-27〉（中略）イエスはまた心を傷めつつ墓にいたり給ふ。イエス言ひ給ふ『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタは言ふ『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』〈38-39〉（中略）声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給へば、死にしもの布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る。顔も手拭で包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。〈43-44〉

ラザロの復活の場面は以上のごとくである（この事件をきっかけに、イエスを殺す計画が具体化されてゆく）。ラスコーリニコフは、老婆アリョーナ殺しの際、偶然帰宅した何の罪もない彼女の妹リザヴェータも殺害してしまう。そのリザヴェータの聖書を、訪ねたソーニャの部屋の箪笥の上に見つけて、ラザロの復活の場面を読んでもらうシーンである。

"Read! I insist upon it! Used you not to read to Elizabeth?"／Sonia opened the book and looked for the passage. Her hands trembled. The words stuck in her throat. Twice did she try to read without being able to utter the first syllable.

【「読んでくれ！　僕は読んでもらいたんだ！」と彼は言いはった。「リザヴェータには読んでやったんだろう」／ソーニャは聖書を開いて、そのページをさがした。手がふるえて、声がもたなかった。彼女は二度読みかけたが、二度ともはじめの一節を読み終えることができなかった。】

ソーニャは、〈二度読みかけたが、二度ともはじめの一節〉すなわち、「ここにやめる者あり、ラザロと云ふ、マリヤとその姉妹マ

ルタとの村ベタニヤの人なり。」〈を読み終えることができなかった〉のである。が、ソーニャは、〈やっとの思い〉で読み出す。しかしまた、彼女は〈第三節のところで声がうわずって〉読めなくなってしまう。

Raskolnikoff partly explained to himself Sonia's hesitation to obey him; and, in proportion, as he understood her better, he insisted still more imperiously on her reading. He felt what it must cost the girl to lay bare to him, to some extent, her heart-of-hearts. She evidently could not, without difficulty, make up her mind to confide to a stranger the sentiments which, probably, since her teens had been her support, her viaticum—（中略）He saw all this, but he likewise saw that, notwithstanding this repugnance, she was most anxious to read—to read to him, and that now—let the consequences be what they may! The girl's look, the agitation to which she was a prey, told him as much, and, by a violent effort over herself, Sonia conquered the spasm which parched her throat, and continued to read the eleventh chapter of Gospel according to St. John. She thus reached the nineteenth verse:—

【ソーニャがなぜ彼に読んでやることをためらうか、ラスコーリニコフにはうすうすわかっていた。そしてそれがはっきりわかってくるにつれて、彼はますますい苛立ち、乱暴に読ませようとした。いま彼女には自分のすべてをさらけ出すことがどれほど辛かったか、彼はわかりすぎるほどわかっていた。こうした感情が実際に彼女のほんとうの、しかもおそらく、もうまえまえからの秘密となっていたらしいことを、彼はさとった。（中略）しかし同時に彼はいま、しかも確実に、彼女が読みかけて、何ものかをひどくおそれ、心を痛めてはいるが、その反面、どんなに心が痛もうが、どんな不安におびやかされようが、なんとしても読みたい、しかも彼に読んでやりたい、彼に聞かせたい、しかもどうしてもいま——《あとでどんなことになろうと！》……というせつないまでの気持ちがあることを、はっきりとさとった。彼はそれを彼女の目の中に読んだ、彼女の狂喜とも言える興奮からさとった。……彼女は自分をはげまし、朗読のはじめに彼女の声をとぎらせたのどのふるえをおさえて、ヨハネによる福音書の第十一章の朗読をつづけた。こうして彼女は十九節まで読んだ。】

ソーニャの聖書朗読が順調に始まらないのを見て、ラスコーリニコフは〈彼はますますい苛立ち、乱暴に読ませよう〉とするのである。が、彼は、ソーニャが〈どんなに心が痛もうが、どんな不安に

おびやかされようが、なんとしても読みたい、しかも彼に読んでやりたい、彼に聞かせたい、しかもどうしてもいま〉とたゆたっていることを知る。さらには、《あとでどんなことになろうと！》というソーニャの切ない感情をはっきり読み取る。一方ソーニャもそんなラスコーリニコフの揺籃をしかと受け止め、ヨハネの福音書第一一章の朗読を始め、一九節まで読んだ。さらに、二二節まで読んで彼女は、朗読をやめた。〈そこで彼女は、また朗読をとめた。ふるえて、また声がとぎれそうな気がして、恥かしくなったのである……〈Here she paused, to overcome the emotion which once more caused her voice to tremble〉〉。が、さらに、二三節、二四節、二五節、二六節「凡そ生きて我を信ずるものは、永遠に死なざるべし。汝これを信じるか」読み、〈そして、苦しそうに息をつぎながら、ソーニャはまるで自分がみんなのまえで懺悔しているように、一語一語はっきりと力をこめて〈And, although she had difficulty in breathing, Sonia raise her voice, as if in reading the words of Martha she was making her own confession of faith〉〉二七節「主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず。」を読む。また読み止るが、思い直して〈三十二節まで読んだ〉。さらに三十七節まで読み続ける。

Raskolnikoff turned towards her and looked at her with agitation. His suspicion was a correct one. She was trembling in all her limbs, a prey to fever. He had expected this. She was getting to the miraculous story, and a feeling of triumph was taking possession of her. Her voice, strengthened by joy, had a metallic ring. The lines become misty to her troubled eyes, but, fortunately, she knew the passage by heart. At the last line: "Could not this man, which opened the eyes of the blind—" she lowered her voice, emphasizing passionately the doubt, the blame, the reproach of these unbelieving and blind Jews, who, a moment after, fell, as if struck by lighting, on their knees, to sob and to believe.

【ラスコーリニコフは彼女のほうを向いて、感情の目で彼女を見た。そうかやっぱりそうだったのだ！　彼女はもうほんとうのおこりにかかったようにがくがくとふるえていた。彼はそれを待っていたのだった。彼女はいまだ例のない偉大な奇跡の話に近づいた、そして偉大な勝利の感情が彼女をとらえた。彼女の声は金属音のように冴えわたった。勝利と喜びがその声にこもり、その声を強いものにした。目のまえが暗くなって、行がかさなりあったが、彼女はそらでおぼえていた。《あの盲人の目を開けたこの人でも……》という最後の節で、彼女はちょっ

と声をおとして、信じない盲人のユダヤ人たちの疑惑と、非難と、誹謗を、はげしい熱をこめてつたえた。彼らはもうじき、一分後には、雷にうたれたようにひれ伏し、号泣し、信じるようになるのだ……】

そして、次第にソーニャの声は熱気を帯び、勝利と歓喜にうち震えるのである（このソーニャ像が、「南京の基督」宋金花像を形象化することは容易に想像できる）。

"Yes," thought she, deeply affected by this joyful hope, "yes, he—he is blind, who dares not believe—he also, will hear—will believe in an instant, immediately, now, this very moment!"

【〈彼も、彼も——信じない盲者だ、——彼ももうすぐこの先を聞いたら、信じるようになる、そうだ、それにきまっている！　もうじきだ、もうじきだ〉〉こう思うと、彼女は喜びがもどかしくてがたがたふるえた。】

さらに、三八節「イエスはまた心を傷めつつ墓にいたり給ふ。」三九節「イエス言ひ給ふ『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタは言ふ『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』」を読み継ぐ。ソーニャは、〈四日という言葉に力をこめて（She strongly emphasized the word four.）〉読む。さらに、四〇節から四三節「声高く『ラザロよ、出で来たれ』と呼ばわり給へば、」までを読んでゆく。そして、彼女が四四節「死にしも」まで読んだところで、「彼女は自分がその目で見たように、感激に身をふるわし、ぞくぞくしながら、勝ちほこったように声をはりあげて読んだ（on reading these words, Sonia shuddered, as if she herself had been witness of the miracle）」と語りが挿入されている。そして四三節の続き「布にて足と手とを巻かれたるまま出で来る。顔も手拭で包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。」と四五節を読む。そこで、ソーニャは、

She read no more,—such a thing would have been impossible to her,—closed the book, and, briskly rising, said, in a low-toned and choking voice, without turning towards the man she was talking to : "So much for the resurrection of Lazarus." She seemed afraid to raise her eyes on Raskolnikoff, whilst her feverish trembling continued.

【彼女はその先は読まなかった、読むことができなかった。彼女は、聖書をとじて、急いで立ちあがった。／「ラザロの復活はこれでおわりです」ととぎれとぎれにそっけなく囁くと、彼女は顔をそむけて、彼を見るのが恥ずかしいように、目を上げる勇気もなく、じっと身をかたくした。熱病のようなふるえは

まだつづいていた。】

ここまですすんで、テキストは、ソーニャの部屋の描写をしている。それは、いうまでもなく、芥川が藤岡書簡で「このラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節—ヨハネ）をよむscene」を容易に想起させる。

The dying piece of candle dimly lit up this low-ceilinged room, in which an assassin and a harlot had just read the Book of Books. At most, five minutes elapsed.

【ひんまがった燭台の燃えのこりのろうそくはさっきから消えそうになっていて、不思議な因縁でこの貧しい部屋におちあい、永遠の書を読んでいる殺人者と淫売婦を、ぼんやり照らしていた。五分ほど過ぎた。あるいはもっと経ったかもしれぬ】

「このラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節—ヨハネ）をよむscene」とは、もちろん、この場面に限定されるものではない。ラスコーリニコフがソーニャの部屋を訪ね、彼女が父マラメラードフが死ぬ一週間前に「本を読んでくれ」と言ったにも拘らず願いを聞き入れなかったことに苦しんでいることを話している辺りから〈toucting〉の感情が沸いたと考えられる。図版3のこの箇所に〈toucting〉の書き込みがある。すなわちこの箇所から始まって、先のソーニャの部屋の描写のあたりまでを〈toucting〉の該当箇所であったとして捉えておきたい。（図版2の箇所以降四部の終わりまで〈toucting〉のメモは見当たらない。）

"Yes, I—I. I had gone to see them," she went on, weeping, "when my father said to me: 'Sonia, I have a headache, read me something. There is a book.' It was a book belonging to Andreas Semenovitch Lebeziatnikoff, who always used to lend us very funny books. 'I must really be off,' I answered, as I had no desire to read, having only called on them, to show Catherine Ivanovna a purchase I had made. Elizabeth, the huckstress, had brought me cuffs and collars, pretty embroidered collars, almost new. I had them cheap. They pleased Catherine Ivanovna amazingly, and she tried them on whilst looking approvingly in the glass. 'Give them me, Sonia, do,' said she. Of course they were of no use to her, but she is like that. She always recalls her happy younger days! She looks at herself in the glass although for very many years she has had neither gowns nor anything else. Another thing, she never asks the least thing of anybody. So proud is she, that she would rather give away the little she has, and yet she asked me for those collars, being so pleased with them.

touching

図3

いかに、このシーンが強烈であったか容易に想像できる。ラスコーリニコフが、まさにラザロのように〈石〉に囲まれた孤独の中から、次第に解き放たれてゆくことになる。小説時間の九日目であるが、第四部が、作中最も重要な部分である。ラスコーリニコフが、ソーニャに犯行を告白し、ソーニャはラスコーリニコフに〈今すぐ

外に行って、十字路に立ち、ひざまづいて、あなたがけがした大地に接吻しなさい、それから世界中の人々に対して、四方に向かっておじぎをして、大声で《私が殺しました!》というのです。そしたら神様があなたに生命を授けてくださるでしょう。行きますか?行きますか?〉（“Go forthwith, go this very moment to the nearest public place, prostrate yourself, kiss the earth you have stained, bow down in very direction, and proclaim at the top of your voice to the passers-by, 'I am a murderer !' and God will give you peace again! Will you go? Will you go?”）という作中の大きな頂点の一つをもたらす、ソーニャが「ラザロの復活」を読む作中で際立って印象的なシーンである。たとえば、芦川進一は、この「ラザロの復活」を次のように論じる。

ドストエフスキーにおいては、この「虚無」からの解放、「死からの復活」の課題が、「ラザロの復活」のテーマとして『新約聖書』の世界と連なり、究極的には彼のイエス探求の課題と不可欠に結びついていたという事実である。『夏象冬記』において初めて登場した「ラザロの復活」は、「罪と罰」において、先にもソーニャの例で見たように、決してお定まりの聖書語句の引用の次元に納まることはなかった。死して腐臭を発するものとはマラメラードフや殺人犯ラスコーリニコフのみでなく、またニヒリスト・スヴィドリガイロフのみでもなく、ほかならぬソーニャその人が抱える運命でもあり、彼ら一人一人が「ラザロ」として古き生を死に、新たな甦りを希求する存在として描かれてゆくのである。（「虚無としての腐臭」05・5『キリスト教文学研究』23号）

「ラザロの復活」は、ドストエフスキー文学を通底する重要なモチーフであった。それに若き芥川が共鳴したのは興味をそそるのである。

二一歳の芥川が、先の藤岡書簡で吐露しているように、はじめてドストエフスキー作品に触れ、さらに、「罪と罰」の「このラスコルニコフと云ふ人殺しとソニアと云ふ淫売婦とが黄色くくすぶりながら燃えるランプの下で聖書（ラザロの復活の節―ヨハネ）をよむscene」[7]に目を留めて、さらにこの場面に強烈に共振したことは、興味深い。既に述べたように、ドストエフスキーの名前は彼の中にあった。それなりの期待で、「罪と罰」を読み、期待通り、それ以上に彼に深い感動を与えられ、さらにテキストの感動が等身大に伝わったことは、想像するに難くない。そのドストエフスキーが初期の彼の文学に翳りをおとさなかったとは考えるほうが困難である。そのドストエフスキー体験は、彼の実質的処女作である「羅生門」に発見できるのである。七年後の「南京の基督」まで待つまでもな

く、既に一年後の「羅生門」の地底のエネルギーになっていたのである。既に述べたように、「羅生門」執筆に長い時間をかけ構想されていたことを思えば、ドストエフスキー体験、「罪と罰」読了の震撼は、「羅生門」執筆の地底のエネルギーに影響を与えたことは想像するに難くない。

三　「羅生門」の〈下人〉に見られる「罪と罰」のラスコーリニコフ

「羅生門」への「罪と罰」の影響関係については、前稿で述べているが、簡単に繰り返しておきたい。周知のとおり、七〇年代あたりから、関口安義の「己を繋縛する者からの解放の叫び」、笹渕友一の「積極的な意欲に満ちた作品」、首藤基澄の「大胆な行動者」「生の閉塞情況をつき破る若さ」を読み取る論[8]を先蹤として、「羅生門」は、エゴイズムを暴く物語としての制度的読みから、緩やかに離陸した（もちろん、従来の読みは現在も強力な〈読み〉として評価されている）。筆者も「門」（漱石）を視野に入れ、「若者の行動論理獲得の物語」「踏み越え・越境の物語」として読んだ[9]。その果実として、〈踏み越えの物語〉といわれている「罪と罰」が視野に入ってきたのである。

内村剛介は、「踏み越え」を、テクスト「罪と罰」のキーワードとして捉えて、

ラスコーリニコフのテーゼは「『犯』は『罪』ならず」である。「踏み越え」（Verbrechen, crime）は「犯」であっても「罪」（Sunde, sin）にならないというのだ。「犯」と「罪」との間に割って入りその関係を「たたき割る」（ラスコローチ）のが、ラスコーリニコフだ。

（人類の知的遺産51『ドストエフスキー』昭53・5・20　講談社刊）

と、述べている。キーワード「踏み越え」によって、「はじめに」で触れたように、前稿において、二作品のその影響関係の可能性を解いたのである。が、前稿においては、〈踏み越え〉〈被害者による加害者への許し〉などに触れ、更には、描写の類似、下人とラスコーリニコフに触れたが、本稿では、論の成り行き上、前稿に重複することを可能な限り避け、「羅生門」との関りについて補足的に触れておく。

冒頭について言えば、「羅生門」は、

ある日の暮れ方の事である。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

である。芥川文庫『Crime and punishment』「罪と罰」の冒頭は、

ONE sultry evening early in July a young man emerged from the small furnished lodging he occupied in a large five-storied

house in the Pereoulok S——, and turned slowly, with an air of indecision, toward the K——bridge.

【七月のはじめの酷暑のころのある夕暮れである。一人の青年が、小部屋を借りているS横丁のある建物の門をふらりと出て、思いまようらしく、のろのろと、K橋のほうへ歩き出した。】

むしろ、あまりの類似に驚く。「ある日の暮れ方の事である。」はONE sultry evening early in Julyに呼応する。また「一人の下人」（周知のように、「面皰」を有することから鑑み青年である）がa young manに呼応する。さらに、「四、五日前」にリストラされて行く当ても生活の当ても尽き逡巡の果てに羅生門にたどり着く下人の心情とa young manのwith an air of indecisionの状況とは相通じる。a young manは、Poverty had once weighed him down, though, of late, he had lost his sensitiveness on that scoreとあり、下人同様経済的に行き詰っている。二つのテクストは、書き出しにおいて、多くの類似性を持つことが理解できよう。

さらに、前稿で触れたが、二つのテクストの主要登場人物である〈下人〉と〈ラスコーリニコフ〉の共通点が多く見出すことが出来る。①市民社会と共生していない男、②二元的観念を持つ男、③都市を彷徨する男、④〈階上〉で犯行する男、⑤老婆に加害する男、⑥〈階段〉を上り下りする男、⑦〈死産児〉から感情を開花する男、⑧〈被害者による加害者の許しの連鎖〉（女→老婆→下人　リザヴェータ→（ソーニャ）→ラスコールニコフ）などである。前稿を繰り返すことになるが、簡潔に整理しておく。下人は〈四五日前〉に屋敷から解雇されているにもかかわらず、〈下人〉と呼称され、ラスコーリニコフは既に大学を退学しているにもかかわらず〈学生〉と呼称され、社会からの視線を避けている。（①）。下人は、踏み越えの選択肢を餓死か盗人かという、ラスコーリニコフは、普通の人と特別な人という、極端な観念的二元論を有している（②）。二人とも、都市空間を〈彷徨〉し（③）、大地ではなく〈階上〉において（④）、〈老婆〉に加害する（⑤）、さらに〈階段〉を上り下りする（⑥）男である。さらに、老婆は、若い女を「仕方ない」という黙認という形で許す、さらに同じように「仕方ない」という言葉で自己を許す、下人は「きつとそうか」といって、法を獲得する。ラスコーリニコフは、偶発的に殺害してしまったリザヴェータの聖書をソーニャの部屋で発見し、彼女にその聖書のラザロの復活を読んでもらって再生を図るきっかけを与えられる。

以上のように、下人とラスコーリニコフとの間に共通点を発見できる。もちろん、致命的な違いは、ソーニャ〈不在の男〉とソーニャを〈同伴する男〉である。ソーニャ的なるものを描けなかったことは、芥川の問題であるばかりでなく、日本的エトスの問題にも発

展しよう。が、芥川に限っていえば、「羅生門」執筆の背後にあった先に触れた〈愉快な小説〉執筆の感情が関係しているように思われる。彼の裡には、末尾を「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。」（「羅生門」初出稿）にした感情があったのである。まだ、「半年ばかり前から悪くこだわつた戀愛問題」がもたらす「獨りになると気が沈んだ」情況からの〈踏み越え〉の感情である。「下人」に託されたものは〈踏み越え〉に投錨されていた。さらにいえば、「羅生門」のテクスト力学は、踏み越えの行為そのものに収斂されていた。それは、初出稿の一見雑な末尾にも伺えるのである。〈ソーニャ〉不在の補填として、一旦は文壇登場第一作に選んだ（結果的には「芋粥」になった）「偸盗」（'17〈大6〉4、7『中央公論』）があったのではないかと考える（〈ソーニャ〉的なるものに限れば阿漕の存在に託されていよう）。それは、末尾にも顕著に現れている。

この二作品「羅生門」と「罪と罰」の、あるいは下人とラスコーリニコフの内実において、その二つのテキストの末尾について、触れておきたい。「羅生門」は、二回の改稿を経ていることは周知のことである。

①下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。

（大四・一一『帝国　文学』初出稿）

②下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた。

（大六・五　第一短編集『羅生門』稿）

③下人の行方は、誰も知らない。　（大七・七　春陽堂刊『鼻』定稿）

「罪と罰」の末尾は、次のようになっている。

But a now history commences: a story of the gradual renewing of a man, of his slow progressive regeneration, and change from one world to another —an introduction to the hitherto unkown realies of life. This may well form the theme of a new tale; the onc we wished to offer the reader is ended.

【しかしそこにはもう新しいものがたりがはじまっている。一人の人間がしだいに更正してゆくものがたり、その人間がしだいに生まれ変わり、一つの世界から他の世界へしだいに移って行き、これまでまったく知らなかった新しい現実を知るものがたりである。これは新しい作品のテーマになり得るであろうが、—このものがたりはこれで終わった。】

「羅生門」では、〈永年〉屋敷で仕え屋敷の論理の中で生きてきた〈面皰〉を有する年若き男がリストラされ、行くべきあてもなく〈羅生門〉に辿りつく。そして、万事休すにも拘らず明日伸ばしをし楼上で夜を明かそうとするが、そこで老婆から生きる〈法〉を獲得し、境界線を〈踏み越え〉た。そこでテキストは閉じられている。

「罪と罰」は、ラスコーリニコフが、〈踏み越え〉たところから始まり、しかし想定した完全な〈踏み越え〉は実現せず、絶えざる恐怖と緊張に襲われる。ソーニャとの出会いによって、蘇生感にたどり着くところでテキストは閉じられている。さらに、「もう新しいものがたりがはじまっている」、その物語とは「一人の人間がしだいに更正してゆくものがたり」と、開かれつつ閉じられている。「羅生門」執筆時、芥川が「罪と罰」を意識していたならば、「新しいものがたり」という宿題が課せられていたはずである。それは、続「羅生門」である「偸盗」執筆に孕まされていたと考える。

「偸盗」は、芥川にとって、重要な作品であった。執筆後の自虐的言説は、それを裏付けもする。さらに改作について拘泥は、彼の裡に未達成感のようなものが澱のようにあったことが伺える。その〈澱〉を解くひとつの鍵が、「羅生門」執筆の背後に潜む「罪と罰」への拘りであったと考えられる。清水孝純は、夙に「日本におけるドストエフスキー」('73・9『東大比較文学』)で、「偸盗」とドストエフスキーとの影響を指摘している。この指摘には、「カラマーゾフの兄弟」には言及しているが、「罪と罰」との関係は「南京の基督」にとどまっている。「偸盗」に、ドストエフスキー世界を見たことは興味深い。論者は、「偸盗」を〈下人〉の後身たちをさまざまな愛の形で救済する物語として読んだことがあるが、[10] その時点では「罪と罰」は視野に入っていなかった。しかし、「罪と罰」によってのドストエフスキー体験を視野に入れると、芥川の〈新しい物語〉執筆の情念が「偸盗」への拘りとして理解できよう。

繰り返してきたように、〈下人〉とラスコーリニコフの精神性の成熟度は、極めて乖離するといってよい。が、〈下人〉造形に、ラスコーリニコフ像がかなりの影響を与えていたことは想像するに難くない。

むすび

芥川龍之介のドストエフスキー体験については、はじめに述べたように、ピンポイントで論じたものは少ない。あったとしても、六年九箇月後の「南京の基督」までとんでいる。が、本論で論じてきたように、強烈なドストエフスキー体験は、「南京の基督」を待つまでもなく、約二年後の「羅生門」執筆の大きな動機になっている。それは、〈下人〉とラスコーリニコフとの比較によって検証できた。さらに、「偸盗」への拘りは、「羅生門」執筆の地底に「罪と罰」のかかわりを置くことでより説明ができる。

ドストエフスキー体験の芥川龍之介の文学的出発時における重さを考える意味は大きい。「歯車」が、ドストエフスキー的世界を日本において顕現した作品の一つであることは、言を俟たない。しか

し、晩年ではなく、初期において二一歳の芥川に与えた衝撃は、のち、トルストイ、ゲーテ、A・フランスについで引用が多いのも伺える。青年芥川龍之介のドストエフスキー体験は、想像以上に大きく、晩年にいたるまで彼の文学創造に大きな影響を与えたのである。

註

（1）芥川龍之介とドストエフスキーについては、「ほとんど本質的影響関係は感じられない。」（小沢政雄「日本文学とドストエフスキー」'56・9『文学』）から始まり、吉田精一「ドストエフスキーと日本文学」（'64・10　筑摩書房版『ドストエフスキー全集』別巻所収）で「蜘蛛の糸」と「カラマーゾフの兄弟」との関連が指摘されたりしたが、掘り下げはなかった。清水孝純「日本におけるドストエフスキー」（'73・9　東大『比較文学研究』22号）に至って、本格的に論じられるようになった。更に、七〇年代後半になって、小沼文彦「ドストエフスキー」（'76・1　福田・剣持・小玉編『欧米作家と日本近代文学』第三巻）、国松夏紀の「芥川龍之介におけるドストエフスキー―遺稿『暗中問答』を中心に―」（'79・3『比較文学年誌』）、「芥川龍之介におけるドストエフスキー―その二『歯車』を中心に―」（'81・3　同）が出た。国松は、後者において「この（筆者註「歯車」）のような、〈罪〉と〈罰〉との逆倒、或いは、パラドシカルな告白のかたちは、『罪と罰』のラスコーリニコフにも共通している。ただしラスコーリニコフには、シベリアー＝ソーニャとの愛という出口があったのに対し『僕』の彷徨には、それがない。」と論じた。その後、渡辺正彦は、「芥川龍之介『首が落ちた話』材源考―ドストエフスキー『白痴』との関連―」（'86・3『近代文学論』）「芥川龍之介『猿』論並びに材源考―ドストエフスキー『白痴』との関係―」（'87・3『群馬近代文学研究』）の二つの材源考を公にしている。

（2）前稿で既に指摘したが、管見によれば、大場恒明「『羅生門』に関する一つの仮説―英訳本Crime and Punishment―」（'85・3、『日本女子大学紀要』34号）が唯一である。大場論は仮説を前提に論じられ、文学創造の方法論に触れている。

（3）清水孝純は「この『罪と罰』は恐らくエヴァリマン叢書のものであろう。ガーネット訳はまだ出ていない。手元にあるエヴァリマン叢書の『Crime and Punishment』は初版が一月であるし、四五五頁である。」（'73・9　東大『比較文学研究』）と述べ、大場恒明も「この英訳本には刊行年も訳者名も記載されていないが、刊行年はThe National Union Catalogには〔1910〕としてある。翻訳者はFrederick Whishawと推測される。その根拠は、明治25年の内田不知庵訳『罪と罰』の「例言」に、「千八百八十六年版の英訳本（ヴヰゼツテリ社印行）より之を重訳す。」とあるが、（中略）内田訳と芥川龍之介が読んだ英訳本とを照合すると、Whishaw訳の特徴が両者において一致するからである。（大場恒明「『羅生門』に関する一つの仮説―英訳本Crime and Punishmentとの比較―」（'85・3『日本女子大紀要　文学部』34号）と述べている。なお、Whishawは完訳でなく多少の省訳がある。

（4）大正二（'13）年当時までに、内田不知庵訳『罪と罰』上巻（'92、老鶴圃）同巻二（'93、同）、同改訳（'13、丸善）の翻訳がある。が、

内田訳は、作品の半ば第三編まで。完訳が出るのは、大正三年（'14）の生田長江・生田春月訳『罪と罰』（植竹書院）である。ともに、内田訳は、芥川文庫と同じWhishaw版、生田訳はGarnett版の英訳からの重訳。

（5）清水孝純『ドストエフスキー・ノート―『罪と罰』の世界―』（'81・6　九州大学出版局）

（6）拙稿「芥川龍之介とキリスト教――その二面性（カトリシズム・プロテスタンティズム）をめぐって――」（'75・4　笹淵友一編『キリスト教と文学 第2集』笠間書院刊）

（7）この藤岡宛書簡中の「黄色くくすぶりながら」を、「羅生門」との関連の指摘（日本キリスト教文学会二〇〇六年度三月例会における安藤公美の教示）もあるが、大変示唆に富むものである。ただ、「罪と罰」では、既に引用してあるように、The dying piece of candle dimly lit up this low-ceilinged room, in which an assassin and a harlot had just read the Book of Bookとなっており、「黄色くくすぶりながら」に当たる箇所はない。（なお、ソーニャの部屋は「すれた黄色っぽいぼろぼろの壁紙が四隅は黒くなっていた」【The yellowish and worn paper had everywhere assumed a darkish colour】と描写されている。「黄色くくすぶりながら」は、この部屋のイメージに由来するかもしれない。）安藤氏の指摘にあるように、「羅生門」には、下人が梯子から楼上を伺い見る場面に「その濁った、黄色い光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に」と「黄色い光」が描かれている。「黄色くくすぶりながら」と「黄色い光」の関連については、後の稿を待ちたいが、少なくとも、この二つの表象の関連性の可能性は極めて高いと考える。

（8）笹淵友一の「芥川龍之介『羅生門』新釈」（山梨英和短期大学『国文学論集』'81・10）、は、「羅生門」を「積極的な意欲に満ちた作品」と評し、そこにカタルシスを実現した明るさがあると説く。また、首藤基澄の「読む『羅生門』」（『日本文学』'83・6）では、下人を「大胆な行動者」「通俗的なモラルにとらわれない」人間と評価し、作者芥川を「生の閉塞情況をつき破る若さをもって出発した」、関口安義「初期芥川龍之介の世界―自己解放の叫び―」（'85・4『民主文学』）は、「自己革命の叫び」としている。

（9）「『羅生門』論―異領野への出発・「門」（夏目漱石）を視野に入れ―」（海老井英次・宮坂覺編『作品論　芥川龍之介』'92・12　双文社刊）

（10）「芥川龍之介『偸盗』論―〈黒洞々たる夜〉における〈愛〉のカオス―」（上・下）（『フェリス女学院大学紀要』'81・3、福岡女子大国文学会『香椎潟』同）

（本学教授）